

## セックス・ワーカーへのインターネットによるHIV予防啓発に関する研究 セクシュアル・ヘルス/ライツ啓発の「場」としてのWEB版コミュニティの有効性と課題

中村 美亜 (東京藝術大学 助手)

### 研究要旨

セックスワーカーのセクシュアル・ヘルス/ライツ啓発の「場」としてのweb版コミュニティの有効性と課題を把握すべく、(1) 海外の文献調査、(2) セックスワーカーとHIVに言及した国内のウェブページ(検索で上位にランクされた120ウェブページ)のコンテンツ分類、及び(3) 文献調査で示唆された分析軸(「個人スキル」と「セックスワーカー・フレンドリネス」)に基づく内容検討を行った。

本調査の結果、海外のHIV事情報告や学会・研究会報告など、研究者やNGOの活動家対象が38ページ(32%)、男性顧客側どうしの掲示板・質問サイト・ブログへの書き込みが32ページ(27%)で、HIV/STDs予防啓発を主たる目的にしているのは28ページ(23%)に過ぎないこと、また女性利用者をターゲットにしているのは19ページ(16%)に限られている(サイト数では9)ことが明らかになった。さらに、これら9サイトに関して上記の分析軸で検討すると、5サイトは「個人スキル」についてほとんど言及がないのが判明した。また、それ以外のサイトでも、雇用者目線による記述の仕方や、セックスワーカー向けの情報発信が皆無など「セックスワーカー・フレンドリー」とは言い難いことがわかった。

以上のことから、実効性のあるWEB版コミュニティの構築のために重要なのは、当事者のブログや求人サイトとの連携を深め、セックスワーカーでも見たくくなるような女性向けポータルサイトを創設すること、セーファー・セックスを啓発するためには、自己効力感や労働環境をよりよくするための交渉スキルについて言及したサイトが必要なことが示唆された。また、若者間でのSNSや携帯サイトの利用が増加を考慮するならば、それらの活用も重要になってくると考えられる。

### 1. 研究の背景と目的

近年のインターネットの普及は、以前はつながることが困難であったマイノリティの連携(遠隔地に住む女性どうし、同性愛者、暴力被害者など)に大きな役割を果たしている。これまで社会的に弱い立場にあった人々が、このテクノロジーを利用することで、従来では不可能だった様々な目的を達することができるようになってきたのであり、インターネットのもつ新たな社会的役割の可能性が注目されている。

実際、日本でもカミング・アウトの困難なセックスワーカー(及びセックスワーク経験者)どうしが、匿名のままインターネット上でコミュニケーションを取り合い、予防啓発活動を展開している。例えば、日本におけるセックスワーカーの活動を記したSW・rpmサイト

(<http://www.swrpm.com/>)、あるいはセックスワークで

### HIV感染した人のブログ

(<http://blogs.yahoo.co.jp/yuzumama1968>)など挙げられる。このように、セックスワーカーに向けた日本語によるHIV予防啓発サイトはすでに多く存在しているが、それらの実態は明らかにされておらず、予防啓発手法の有効性についても検証はおこなわれていない。

そこで、本研究では、日本語によるセックスワーカー向けのHIV予防啓発サイトの実態調査をし、そのコンテンツや方法について分析を行う。特にインターネットによる予防啓発手法の効果や問題点に関する先行研究を検討することによって、今後、より効果的なセックスワーカー向けの予防啓発をインターネット上で実践していくためには、どのような手法を開発していく必要があるのか考察し、具体的な提言を行っていく。

今回の調査分析では、検索で上位にランクされるページ

内容の分類、及び「個人スキル」（意志決定、コミュニケーション、交渉術）と「セックスワーカー・フレンドliness」（誰が発信しているか、労働条件改善についてのアドバイス、エンパワメント）に関する記述内容の検討に焦点をあてた。

## 2. 先行研究レビュー

インターネットへの社会的関心の高まりとともに、インターネット上での HIV に対する予防啓発の実効性や可能性に関する研究の成果が発表されるようになった。本論では、それらの中から、先行研究に関する考察が充実しており、且つ、本研究に応用可能な内容をもつ3つの論文を中心にレビューを行う。（日本語による医療情報提供サイトに関する文献レビューは付録1に、また「ユーザビリティ」に関する最新の情報は付録2に掲載した。）

UCSF, AIDS Research Institute の「インターネットが HIV 予防にどう貢献できるか (How does the Internet affect HIV prevention?)」という小論文は、インターネットの「出会い系サイト」でセックス・パートナーを探し求める MSM に焦点をあててながら、「なぜインターネットが HIV 予防に関係するのか」、「インターネットは HIV リスクとどんな関係があるのか」、「インターネットは予防啓発に役立つのか」、「どんな研究や活動がこれまでなされたか」という点からこれまでの取り組みを概観し、「今後どのような取り組みが必要か」という提言を行っている<sup>1</sup>。これまで行われた取り組みの例としては、以下のようなのが紹介されている。

- コミュニティベースの組織 (CBO) が、メーリング・リストを配信したり、アウトリーチ・ワーカーをチャットルームや出会い系サイトに送り込み、HIV 予防やセーフター・セックスについてのディスカッションを展開している。
- MSM 向け HIV 予防啓発サイト“PowerOn” (Prevention Organizations With Empowerment Resources On the Net) は、インタラクティブなウェブサイト運営している<sup>2</sup>。

- 都市部以外に在住の MSM を対象にした HIV 予防啓発サイトとしては、“Wrapp.net”の取り組みがある<sup>3</sup>。
- InSpot は、HIV/STD 検査を受けた男性が自分のパートナーにも結果を E カードで通知するサービスを実施している<sup>4</sup>。
- 求職情報から中古品販売まで多量の広告を掲載する Craigslist は、出会い系の広告サイトとしても知られているが、セーフター・セックス情報とサンフランシスコ市のクリニックのサイトへのリンクを設けている<sup>5</sup>。

これらを踏まえ、今後の課題としては、技術革新と並行しながら、人々の行動変容を促す新しい予防啓発プログラムの開発が必要であると同時に、現存するウェブサイトの実際の効果について検証を行い、実効性があるものについては、新規サイトのモデルにしていくことが重要であると提言を行っている。

一方、*Health Education Research* は、2001 年に「健康教育とインターネット—ある革命の始まり」(Health education and the internet: the beginning of a revolution) という特集を組んでいるが、その中に、HIV/STD 関連の研究も含まれている。Shena Salyers Bull らによる「インターネットにおける STD/HIV 予防の障壁」という論文では、2000 年に実施した性的なリスク行動に関するインターネット調査の結果 (有効回答数 4601 人) の報告がある (Bull *et al.*, 2001)。

インターネットが多くの人々にとって身近なものになるにつれ、インターネット上での予防啓発の数は増加の一途をたどったが、そうした手法については、従来から様々な功罪が指摘されてきた。長所として、制作・運営に費用がかからない、利用者にとって身近で便利なツールである、

---

が紹介されているが、現在は

<http://www.poweronkansascity.org/>に移行している。

<sup>3</sup>日本語版 Wrapp.net は、2008 年 1 月 31 日現在、STD 研究所 (std-lab.jp)、山の手クリニック (www.y-cn.jp)、東京ステーションクリニックの HIV 即日検査

(<http://station-cl.jp/HIVquicktest.htm>)、ふじメディカル株式会社さくら医科研究所 (www.fujimedical.jp)、けんこう専科のエイズ検査キット (www.kenkousenka.jp) にリンクされている。

<sup>4</sup> <http://inspot.org>

<sup>5</sup> <http://www.craigslist.org>

<sup>1</sup> <http://www.caps.ucsf.edu/pubs/FS/internet.php>  
(Copyrighted on January 2007)

<sup>2</sup>上記の論文では、<http://depts.washington.edu/poweron>

適切な情報を多数の人に送ることができるという点が挙げられる反面、短所として、実効性の不確かさ、情報の質のばらつき、プライバシー侵害の危険性、情報にアクセスできる人とできない人の格差、インターネットを用いた予防啓発手法開発の遅れが問題視されている。

実際、これまでの研究で、アメリカでは6000万人の成人がインターネット上での健康情報にアクセスしている一方、情報の正確さを特定するのが利用者にとって困難であるという報告 (Gustafson *et al.*, 1999) や、性教育に関する情報を得ようとインターネットにアクセスした場合、キーワード検索によって600万近くのウェブページがヒットするにもかかわらず、適切な情報が掲載されているのは、わずか41ページに過ぎないという報告 (Smith *et al.*, 2000) がなされている。また、利用者にとっては、プライバシーが保護されるかどうか最大の関心事 (Winker *et al.*, 2000) であることが指摘されている。一方で、アメリカ国内では、インターネットの情報にアクセスできる人とできない人の格差は、徐々に縮まりつつあることが複数の統計から示されている。

そこで Bull らは、2000年の4月3日から8月3日の18週間に、www.SexQuiz.orgの利用者に協力を呼びかけ、性的なリスク行動に関する68項目の質問をおこなった。結果は、STD/HIV 予防情報サイトがあれば、アクセスするだろうと回答した人が61%であったのに対し、メールによる予防情報には45%、チャットでは30%であった。また、インターネットによる予防情報には、MSMとSTD検査の受験経験者に、より効果があるという結果が出た。つまり、多くの人にとって、そうした情報は不要とは思われないものの、わざわざ見るほどのものではないと認識されているということであり、既に問題意識の高い層 (MSMとSTD検査受験経験者) 以外には、際立った効果があまり期待できないということである。したがって、著者らは、インターネットを通じて、STD/HIV についてのリスクを周知させること、そして、効果的な発信方法 (例えば、出会い系サイトとの連携) が重要であることを、今後の課題と結論づけている。

2004年には、*AIDS Care* もインターネットに関する特集 (The internet and HIV/STD prevention) を組んでい

る「STD/HIV 予防について語ること—オンライン・コミュニケーションについての考察」である (Keller *et al.*, 2004)。

Keller らは、インターネットによる予防啓発の有効性をサポートする研究結果として、「セックスについて語ることで、性的健康が保たれるという研究」 (Moore *et al.*, 1995; Gurzman *et al.*, 2003; Salway, 1994<sup>6</sup>; Santhya & Dasvarma, 2002)、「コミュニケーション・スキルは教えられるという研究」 (Cash, 1995)、「オンライン教育の効果についての研究」 (Fleewood *et al.*, 2000; Bakx *et al.*, 2002; Young 2003) を挙げている。さらに、理論的根拠としては、社会学習理論 Social Learning Theory (Bandura, 1986)、社会認知理論 Social Cognitive Theory (Bandura, 1995)、健康信仰モデル Health Belief Model (Rosenstock & Strecher, 1997) が重要であるとしている。

Keller らの調査は、(1) 10代向けの HIV/STD ウェブサイトで、どんなコミュニケーション・スキルが示されているか、(2) インターネットでの HIV/STD 予防メッセージにおいて、ユーザビリティの長所・短所はどこにあるのか、を探ることを目的にしている。調査分析方法については、Ribisl & Kim (2002) によって行われたタバコ会社のインターネット使用に関する研究をモデルにしている。「10代向けかどうか」 (teen-friendliness) については、使いやすさ、言葉、見た目、絵柄、声の調子 (文体) による分析尺度を開発し、分析者によるコーディングにばらつきが生じないように精度を高めた。また、検索語としては、大学生のモニターを用いて調査した結果、思春期 (adolescents) や10歳代 (teenagers) よりも、「ティーン」 (teens) の方が、実際に使用される公算が高いことが示唆された。そこで、「ティーン」 (teens) と HIV、AIDS、STD(s)、safe sexなどを組み合わせたもののうち、使用頻度が高いと判断された下記の6フレーズが、検索キーワードとして採用された。当時、アメリカの3大検索サイトであった Netscape, Lycos, Yahoo を使い、6つの検索キーワードでヒットした件数は以下の通りである。

<sup>6</sup> 本論文中では (Salway, 2004) と記載されているが (p. 979)、1994年の誤記である。

HIV + teens (7,466)  
AIDS + teens (34,269)  
STD/STDs + teens (2,831)  
sexually transmitted disease/diseases + teens (2,727)  
sex disease + teens (12,897)  
safe sex + teens (27,030)

また、各検索サイトでの検索結果の内、上位 100 ページを抽出し (Yahoo 6x100=600、Netscape 178<sup>7</sup>、Lycos 6x1000=600)、合計 1378 ページをサイトの内容によって以下のように分類した。

現在使用されていない (87)  
ティーン向けではない (38)  
ニュース、雑誌記事 (276)  
包括的网站、目次 (359)  
啓発組織 (110)  
HIV/AIDS についてのみ (66)  
ポルノグラフィ (4)  
その他 (350)  
分析対象サイト (89)

この内、分析対象となりうる 89 サイトから重複分 (53 サイト) を引いた 36 サイトを、更なる内容分析の対象とすることにした。

内容分析に用いたセクシュアル・ヘルスとコミュニケーション・スキルに関する指標は、SIECUS (Sexuality Information and Education Council of the United States) のガイドラインに拠っている (SIECUS, 1996)<sup>8</sup>。Keller らが着目した「個人スキル」に関する SIECUS ガイドライン中のポイントは以下の項目である。

#### □意志決定

- 重要な意思決定をする時には、各選択肢の結果、利点、欠点を注意深く考慮すべきである。

<sup>7</sup> Netscape が、なぜ 600 ページではなく 178 ページなのかの詳細は説明されていない。

<sup>8</sup> このガイドラインは、2004 年にさらに改訂が行われている (<http://www.siecus.org/pubs/fact/fact0003.html>)。

- 若者は、性に関する困難な決定に直面することがある。
- 賢明な決定をするには、各選択肢についての正確な情報が必要である。
- 決定に基づいて行動をする時の障壁は、注意深い計画によって克服できることがある。
- 性に関する決定は、今後の健康状態や生涯プランに影響することがある。
- セックス (性交) をするという決定をする場合は、避妊や STD/HIV 予防に関する決定も行わなければならない。

#### □コミュニケーション

- コミュニケーションは、お互いが相手の話をよく聞くことと、はっきり話すことが必要である。
- 性についてオープンに話すことに抵抗感を持つ人たちもいる。
- 性についてオープンに話すことは、より良好な関係を築くのに役立つ。
- コミュニケーションは、性的関係や性的行動についての同意を得るために不可欠である。

#### □交渉

- 交渉とは、罪悪感を持ったり、怒ったり、脅迫したりしないで、自分のニーズを充足させる一つの方法である。

また、ユーザビリティに関しては、アメリカ図書館協会 (American Library Association) の指標 (Kapoun, 2000) を参考にしながら、次のような項目を採用している (ユーザビリティの詳細については付録 2 を参照されたい)。

#### □正確さ

- 誰がそのサイトを書いたか特定できるか？  
著者は、メールアドレスや電話番号を記しているか？
- 目的が明確か？  
そのサイトの目的や、どうしてそのサイトが作られたかわかるか？

#### □典拠

- 資格

どんな信用証明が示されているか？

□目的

- サイトのゴール

このサイトは実は、広告目的では？

- 情報の詳細

どんな考え方が表明されているか？

□更新状況

- リンクの更新状況

いくつリンクが壊れているか？

- サイトの更新

定期的にサイトは更新されているか？

- 情報の新しさ

情報は古くなっていないか？

これらの指標に基づく分析の結果、対象となった36サイトの内、セーフ・セックスに関する交渉について触れたのが2サイト（6%）、基本的なコミュニケーション・スキルに言及したのが7サイト（19%）、最低1つの性に関する意思決定についてのメッセージを発していたのが19サイト（53%）だった。また、ユーザビリティに関しては、技術的問題以外にも、多くのサイトが10代の若者を対象にしていながら、使われている言語の難易度が高く「ティーン・フレンドリー」とは言い難いことが明らかになった。以上の結果から、著者らは、セーフ・セックスの交渉術についての具体的な方法を盛り込む必要性、また10代の若者が興味を持つようなインタラクティブなサイト・デザインを積極的に導入していく必要性が示されると結論づけている。

以上、3つの文献レビューから明らかになったこと、今後の課題と考えられることは以下の点である。インターネットによる予防啓発の有効性については、既に複数の研究が裏付けを行っているものの、実効性の高いサイトを構築していくには、現状についての批判的分析と改良の余地が多く残されている。具体的には、（1）STD/HIVについてのリスクを周知したり、インタラクティブなサイト・デザインを積極的に導入していくことで、利用者が積極的にサイトを閲覧するような対策をとること、（2）出会い系サイトとの連携を通じて効果的な情報の発信方法を開発

すること、（3）セーフター・セックスが実践できるような交渉術についての具体的な内容を盛り込むこと、（4）利用対象者にフレンドリーなコンテンツやデザイン、言葉遣いなどを用いること、が今後重要な課題となる。

### 3. 研究方法と結果

以上の点を踏まえ、特にKellerらの調査分析を参考にしながら、以下では、日本語によるHIV予防啓発サイトが、どの程度女性セックスワーカーにアクセス可能であり、ニーズを満たしているかを調査した。

#### 3.1. 検索サイトの選択

インターネット利用者動向調査及びマーケティング情報の提供を行っているネットレイティングス株式会社の最新月間視聴率ランキング（2007年10月利用動向データ）に基づき、上位2つのポータルサイトを選択した。1位のYahooは、88.10%、2位のGoogleは、43.54%の「リーチ%」（当該月の利用者数を100とした場合の、当該利用者数の割合）と報告されている<sup>9</sup>。

『インターネット白書2006』によると、SNSへの参加が急伸しており、20代では男女とも20%を超える（その内82%はmixiを利用）という結果が出ている<sup>10</sup>。実際、mixiのコミュニティ検索で「風俗嬢」を検索すると29件、「セックスワーカー」では1件がヒットする<sup>11</sup>。コミュニティ紹介を見る限り、これらの多くは現役・元風俗嬢による自助グループ的存在と思われるが、閲覧には管理人からの許可が必要なため、今回は調査の対象外とした。

#### 3.2. 検索語選択と検索結果

各ポータルサイトを用いて、「HIV」と「風俗嬢」、「HIV」と「セックスワーカー」で検索を実施した。検索語の選択については、研究者や活動家の間で用いられる「セックスワーカー」だけでなく、一般的な使用頻度が高い「風俗嬢」を採用した（小谷野、2007）。検索結果の総件数は、以下の通り。

<sup>9</sup> [http://www.netratings.co.jp/ranking\\_NV.html#](http://www.netratings.co.jp/ranking_NV.html#)

<sup>10</sup> 記者発表会バージョンは以下で閲覧可能。  
<http://www.impressholdings.com/release/2006/028/20060607.pdf>

<sup>11</sup> 2007年12月26日の検査結果。

Yahoo 「HIV」と「風俗嬢」 約 57,700 件  
「HIV」と「セックスワーカー」約 13,300 件  
Google 「HIV」と「風俗嬢」 約 79,200 件  
「HIV」と「セックスワーカー」約 8,800 件

### 3.3. 調査範囲の限定

各ポータルサイトの検索結果のうち、上位 30 位を調査対象とした。「HIV」と「風俗嬢」の検索で 60 ページ (30 ページ×2 ポータルサイト)、「HIV」と「セックスワーカー」で 60 ページ (同) が得られた (詳細については、表 1 を参照)。

### 3.4. 検索結果の分類

#### a) 「HIV」と「風俗嬢」 (合計 60 ページ)

「HIV」と「風俗嬢」で検索されたサイトを形態で分類すると、表 2 のように掲示板やブログが多いことがわかる。また、内容によって分類すると、「元風俗嬢の HIV 感染」関連<sup>12</sup>のものが多く (表 3)。

表 2 形態別分類結果 (検索語: 「HIV」と「風俗嬢」)

	ページ数	割合 (%)
掲示板	15 (サイト数 9)	25
個人ブログ	7 (4)	12
当事者のブログ	5 (2)	8
その他	5	8
HI/STDs の予防啓発を主たる目的とするページ	17 (9)	28
質問	11 (6)	18
合計	60	100

表 3 内容別分類結果 (検索語: 「HIV」と「風俗嬢」)

	ページ数	割合 (%)
「元風俗嬢の HIV 感染」関連	20	33
風俗と HIV に関する顧客の質問	10	17
当事者のブログ	5	8
当事者の質問	1	2
HI/STDs の予防啓発を主たる目的とするページ	17 (顧客啓発 2)	28
その他	7	12
合計	60	100

#### b) 「HIV」と「セックスワーカー」

「HIV」と「セックスワーカー」の検索で得られたサイトには、掲示板やブログはごく少数で、ほとんど全てが通常のウェブサイトの形態をとっている (形態別の分類表は割愛)。内容別でみると、表 4 のように、海外事情報告と学会・研究会報告が半数以上を占めているのがわかる。

表 4 内容別分類結果 (検索語: 「HIV」と「セックスワーカー」)

	ページ数	割合 (%)
海外事情報告	26	43
学会・研究報告	12	20
HI/STDs の予防啓発を主たる目的としているページ	11 (8)	18
イベント告知	6	10
その他	5	8
合計	60	100

### 4.5. 分析対象の特定

上記のうち、HI/STDs の予防啓発を主たる目的としているサイトで、かつ女性向けの情報発信をおこなっているサイトを更なる分析対象とした。啓発目的のサイトは、「HIV」と「風俗嬢」の検索結果より 9 サイト、「HIV」と「セックスワーカー」の検索結果より 8 サイトで、合計 17 サイトある。この内、重複分を差し引いた 15 サイトが、

<sup>12</sup> 詳細は、下記の「考察」を参照。

以下のものである。

1. GINA
2. HIV マップ
3. LOVELY POP>STD kinen
4. SKYKISS EXPERIENCE (広島・風俗店側からの携帯サイト、性病撲滅委員会へのリンクあり)
5. SWASH
6. wAds
7. うば (女性専用掲示板) >大人の性病ホームルーム
8. うめやま医院
9. わかりやすいエイズブログ
10. エイズ hiv.jp
11. モモコちゃんねる>フーズク虎の穴
12. 広島デリヘル出張メイドみるフィーユメイド長ブログ(性病や hiv 感染の予防に真剣に取り組む風俗店長ブログ)
13. 元風俗嬢の性病・性感染症性病教室
14. 性病科.com
15. 風俗嬢お仕事マニュアル

以上のうち、女性向けの情報を発信しているのは、以下の9サイトであった。

1. GINA
2. LOVELY POP>STD kinen
3. SWASH
4. wAds
5. うば (女性専用掲示板) >大人の性病ホームルーム
6. わかりやすいエイズブログ
7. モモコちゃんねる>フーズク虎の穴
8. 元風俗嬢の性病・性感染症性病教室
9. 風俗嬢お仕事マニュアル

#### 4.6. 分析の着目点

先行研究レビューで取り上げた Kellerらの研究では、「個人スキル」と「ティーン・フレンドリネス」が着目されたが、本研究では「個人スキル」と「セックスワーカー・フレンドリネス」が分析の焦点となる。「個人スキル」に

関しては、顧客や店長などとの交渉スキルを加えると同時に、情報の発信の仕方や内容がセックスワーカー・フレンドリーか、ということも考慮した。また、昨年度の筆者による研究「性娯楽施設・産業に係る人々への HIV/AIDS 予防介入の可能性—海外の先行事例の検討を通して」を通じて、セックスワーカーの性的リスク行動は本人の意志とともに、店舗内での人間関係に大きく左右されうることが示されているため、店舗内における労働環境に関する指標も加えることにした (中村, 2007)。

以上の点から導き出された分析指標は以下の通りである。

#### A. 個人スキル

##### a) 意志決定

1. 意志決定には、各選択肢についての正確な情報が必要なことが明記されているか?
2. 自分のしたくない行為も、計画的に行動することで回避できる可能性が示されているか?
3. セックス (性交) をする場合には、避妊や STD/HIV 予防が必要なことが記されているか?

##### b) コミュニケーション

4. コミュニケーションには、相手の話を聞くことと、はっきり話すことが重要であると述べられているか?
5. コミュニケーションは、相手の同意を得るために不可欠であることが書かれているか?
6. オープンに話すことで、よりよい関係を築くことができることが記されているか?

##### c) 交渉術

7. 交渉術は、自分のニーズを充足させる重要な方法であることが明記されているか?
8. 相手との交渉術についての情報はるか?
9. 職場の人との交渉術についての情報はるか?

#### B. セックスワーカー・フレンドリネス

##### a) 姿勢

10. セックスワークに対して、偏見や先入観はないか?
11. 教条的な (上から目線の) 言い回しをしていないか?

##### b) 情報

12. セックスワーカーの実情に即して情報が提示されているか?
13. セックスワーカーに有益なサイトがリンクされているか?

##### c) 労働環境

14. 店舗選びについての情報はるか?
15. 店側がセーフター・セックスに好意的でない場合の対応方法は示されているか?

##### d) エンパワメント

16. セックスワーカーのセルフ・エスティーム向上に役立つか?
17. 問題が起きた時に相談できる専門家に関する情報はるか?

#### 4.7. 分析結果

分析結果は、表5の通りである(サイト名は匿名で表示)。この表から明らかなように、店舗選びや店との交渉についての記述は、どのサイトにも見られない。また、個人スキルについては、意志決定、コミュニケーション、交渉術とも十分に言及が行われているとは言い難い。

#### 5. 考察

セックスワーカーとHIVに言及されたヒット数の高い日本語ウェブページ(N=120)の内容を検討した結果、海外のHIV事情報告や学会・研究会報告など、研究者やNGOの活動家対象が38ページ(32%)、男性顧客側どうしの掲示板・質問サイト・ブログへの書き込みが32ページ(27%)で、HIV/STDs予防啓発を主たる目的にしているのは28ページ(23%)に過ぎないことが明らかになった。また、HIV/STDs予防啓発を主たる目的にしているページ中、女性利用者をターゲットにしているのは19ページ(16%)に限られる(サイト数では9)ことが示された。

これら9サイトに関して、海外文献調査から示唆された分析軸で検討すると、5サイトは「個人スキル」についてほとんど言及されていないことが判明した。その中にはセックスワーカー向けの種々の情報を掲載しているサイト(表5のサイトC)もあるが、当事者目線ではなく雇用者目線によって記述されていた。また、残りの4サイトのうち、2サイトが個人スキルについて比較的多くの言及を行っているが、1つ(表5のサイトA)は求人サイトの一部であるため店舗選びや店長らとの交渉スキルについて記述がなく、もう1つ(表5のサイトH)は、セックスワーカーにフレンドリーな情報の発信方法や、セックスワーカーのニーズを満たすような実践的情報が皆無であった。

\*

検索で得られた120ページの分類からは、次のようなことが明らかになった。

(1)「HIV&風俗嬢」で検索されるページの半数以上は、掲示板やブログ、質問サイトでの男性顧客側の書き込みである。HIV/STDs予防啓発の啓発を主たる目的にしているものは、3割に満たない。(ただし、顧客啓発を行っ

ている広島風の風俗店店長によるサイトも2つ検索された。)

これは、今回の調査では上位にヒットされたサイトの多くが「元風俗嬢のHIV感染」関連であったことにも起因している。これは「なにもない」(<http://eizu777.exblog.jp>)というブログにおいて、「元風俗嬢」と自称している著者がエイズにかかったことを綴ったこと、特にエイズが「発病」したとして、背中写真の公開したことによる反響であった(ただし、この写真は現在は削除されている)。実際には、「元風俗嬢」のHIV陽性者のブログは他にも存在していること(「前向きにいきたい」<http://blogs.yahoo.co.jp/yuzumama1968>)を考慮するならば、「なにもない」の記述や写真が(事の真偽はともかく)センセーショナルであったために、性娯楽施設を利用したことのある多くの男性の危機感を煽ったことは明らかである。ここでも「自分にも関係があるかもしれない」という危機意識が、関連ページのヒット数を上昇させたり(=利用者の関心を集めたり)、インターネット上の掲示板やブログへの書き込み行動を促していること(=利用者の積極的関与)を裏づけている。

(2)「HIV&セックスワーカー」で検索されるページの43%は海外のHIV事情、20%は学会・研究会の報告であり、HIV/STDs予防啓発の啓発を主たる目的にしているものは2割に満たない。「セックスワーカー」という言葉が登場するのは、研究者かセックスワークの活動家によるページ以外は、すべて海外のHIV事情を伝えるページに限られている。これは、日本の多くの人々にとって「セックスワーカー」は海外の人たちであり、国内の状況とは切り離されていることを示唆している。

(3)「HIV」と「風俗嬢/セックスワーカー」の検索によってアクセスされる情報の大半は、男性顧客のためのもの、あるいは、男性顧客によるものであり、女性向けのHIV/STDs予防啓発内容を含んでいたのは、非常に少数であった。言いかえるならば、これらの検索語では、セックスワーカーの当事者が必要な情報にアクセスすることが、現状では困難なことを示している。

\*

女性向けサイトの内容分析からは、次のようなことがわかった。



(1) HIV や性感染症についての概説や詳説が掲載されているページが数多く存在する一方で、「個人スキル」について言及しているサイトが圧倒的に少ない。感染症についての知識を広めることは、一定程度実践されているが、現実的な予防方法や実践的なアドバイスは、ほとんど行われていない。これは、海外の先行研究を踏まえるならば、日本語によるインターネット上での HIV 関連情報は増加しているにもかかわらず、ページ閲覧者の行動変容を促すきっかけになっていない、つまり、インターネットによる予防啓発の実効性がまだ低い段階であることを示唆していると考えられる。

(2) 風俗求人サイトの一部に設けられたサイトで、個人スキルに関して細かく言及しているものがある。ただし、求人サイト向けのため、労働環境（店舗選びや店長らとの交渉スキル）について言及がされていない。求人サイトとの連携については、さらなる工夫が必要と思われる。

(3) セックスワーカーが仕事を続ける上で有益と思われる実践的情報を提供しているサイトがあるが、当事者目線ではなく、雇用者目線によって書かれている。言葉使いは教条的であり、セックスワーカー当事者が積極的に読みたくなる文面であるとは思われない。実際、サイトの情報量が膨大であるにもかかわらず、「個人スキル」に関する言及は全く行われていない。その一方、他サイトへのリンクが充実しており、今後、セックスワーカー向けのポータルサイトを構築する参考になると考えられる。

\*

以上をまとめるならば、セックスワーカー当事者のブログや求人サイトとの連携を行い、当事者を含む女性利用者が積極的に見たくなるようなポータルサイトの構築が必要である。セーフター・セックスを啓発するためには、自己効力感や労働環境をよりよくするための交渉スキルについて言及したサイトの構築が急務である。また、今回の研究では十分に検討することができなかったが、昨今の若者間での SNS や携帯サイト利用の増加を考慮するならば、それらの活用が今後ますます重要になってくると考えられる。ただし、これは今後増えていくと思われるウェブサイトのフィルタリング・サービスによって状況が変化するため、慎重に対処する必要があるだろう。

## 【付録1】日本語による医療情報提供ウェブサイト

インターネットの普及に伴い、医療情報の提供がウェブ上で行われる機会が増加した。実際、医療情報にアクセスするには、医学書を繙いたり医者に尋ねるよりも、まずインターネットで検索することが日常化されつつある。

当初、医療従事者は「インターネットがあるのだから、それを使って医療情報を提供してみよう」、あるいは「少しでも多くの医療情報を提供しよう」という動機でサイト作りを行っていたと推測されるが、インターネット上での情報量が過剰供給状態になりつつある現在、新たなウェブサイト構築に際しては、医療情報がインターネット上で配信されることの問題点や課題を十分に認識しておく必要がある。

\*

インターネットの検索エンジンに病名などのキーワードを入力し検索をすると、夥しい数のページがヒットし、利用者は突然、情報の渦に巻き込まれる。かわむらこどもクリニックの川村和久（2002）は、インターネットでは「だれでも医療情報の発信が可能のため、情報が氾濫していることが問題となる。また、情報の信憑性の判断がむずかしいことがあり、正当性の基準が存在しないこと、医師によって治療方針にちがいがあっても原因となる。情報によっての混乱は、患者さんの精神的・肉体的、そして経済的被害の原因になることもある」（116）と指摘している。そして、こうした情報の過剰供給状態の中で重要なのは、「医療側から正確な情報を発信することと、情報を受ける側の学習と選択」（116）であると述べている。

インターネット上では、正確な情報と不正確な情報が混在している。したがって、発信側としては、正確な情報を供給し続け正確な情報の絶対量を増やすことが重要である。しかし、それを進めていったとしても、不正確な情報がなくなることはないため、受信側は自ら学習をし、情報を選択できるようにならなくてはならない。川村の主張は正論だが、どこでどのようにして受信者は学習をし、情報選択を行うスキルを身につけたらよいのだろうか。受信者には、学習する場がないからこそインターネットに頼るという実情があるのだとすれば、情報選択の能力を他所で高めるのを期待することは難しい。実際、現状ではこうした

悪循環を裏づけるかのように、「インターネットが普及すればするほど、孤立している母親たちは情報を求めようと、インターネットの世界に漕ぎだしていく」（119）と、川村も記している。

川村自身の解決としては、「『母親の不安・心配の解消』の基盤はコミュニケーションにある。本来コミュニケーションとは、顔と顔、人と人とのコミュニケーションのうえに成り立つものである。この人と人とのコミュニケーションの足りない部分を補うことを第一と考え、インターネットによるサポートをつづけていきたい。」（119）と述べ、インターネットに、人どうしのコミュニケーションを補足するものとしての意義を見出している。これは、インターネットを介在しても、あくまで情報のやりとりは「個人対個人」であるという立場である。

こうした「個人対個人」のコミュニケーションとは異なる、もっとシステムティックなウェブ活用法を推奨しているのが、田中祐次他（2006）である。川村は個人の医者と患者との関係づくりの延長としてインターネットを活用する立場をとっていたが、田中らは、インターネット・コミュニティを「患者会」の延長として捉えようとしている。

田中らは、現在、患者会は3つの形態をとっていると述べている。

### 1. 病気を中心とした患者会

「教科書」のような存在：病気、治療、保健、カツラのことなど、患者や患者家族の必要な情報が溢れている。

### 2. 病院を中心とした患者会

「患者同士が話す」ことを活動の重要課題に。Evidenced based medicine (EBM) から Narrative based medicine (NBM) への移行を象徴。地元情報の共有。

### 3. 個人のホームページやブログに集まる人たち

個人の情報収集・発信能力による。MIXI や Gree など SNS。（479）

そして、3番目の「患者会」である「ホームページやプロ

グに集まる人たち」の動きは、もはや看過できない存在だと言う。「患者会の動きとして、(中略)3つ目の患者会である個人のホームページ・ブログが多くの患者・患者家族に利用され、その中で、情報のあふれているブログ、読みやすいブログなど、患者や患者家族が望むものを提供しているブログが医療界のアルファブロッガーとなっていく。そして、そのブロッガーたちをまとめたホームページなり団体が今後の医療情報のセンターになると考えられる」(479-480)と述べ、患者らによって発信されたページをまとめる「情報センター」としてのサイト構築が重要であると説いている。田中らは、「医療界、厚生労働省や文部科学省の考える医療や癌情報の方向性が、これらブログの存在を無視して、従来型の教科書をイメージしてインターネットを利用するのであれば、再び、医療界は世の中から遅れてしまうだろう」(480)と、こうした患者自らが情報発信することについて、専門家たちはもっと注目すべきだと警告している。

ただし、ブログには、情報が不確かな場合があることに加え、他の問題点もある。「ブロッガー自身が読み手の気持ちを考えながらブログを作成する傾向があるのがブログの特徴である。つまり、本音を隠すことがある。これは、ブログの限界でもあり、そのために、交流会も必要になってくると考えられる」(480)。このようにインターネットのコミュニティ化を推奨する田中らも、最終的にはインターネットというサイバー空間ではなく、現実の社会での人どうしの交流が不可欠であるとしている。

以上のことは、セックスワーカー向けのインターネットを用いた予防介入プログラムについて以前に調査をおこなった要友紀子ら(2003)が指摘している次の点とも共通する。「インターネットを用いた予防介入プログラムには、医療関係者やSTD検査クリニック、保健所などの連携が重要な鍵となる。SWが、ホームページの情報を実際に使えるためには、信頼できる外部機関の存在が必要であるが、そのようなネットワークは少なく、散在していることがわかった」(377)。やはり重要なのは、受信者に(何らかの方法で)正確な情報が届くようにすること、そして、散在しているホームページをまとめる「情報センター」的なものが必要であること、さらには、インターネットだけでなく、利用者が実際に顔を合わせながら交流する

場が持てる状況をつくること、(これはセックスワーカーの場合非常に困難ではあるが、それにもかかわらず)重要なのだろう。

その一方、国立精神・神経センター精神保健研究所のホームページ内に開設された、自殺予防対策支援ページ「いきる」は、自殺を考えている人向けではなく、「自殺予防策を実施する担当者を支援すること」(285)を目的としている(田島美幸他 2006)。「不特定多数の訪問者が閲覧するページというよりはむしろ、自殺予防対策のトータルサイトを目指して、必要な情報をより洗練した形で掲載する」(287)という方向性である。セックスワーカーの場合にも、ワーカー個人向けだけでなく、セックスワーカー自助グループのリーダーや支援者たちを結ぶサイトは必要であるかもしれない。英語サイトでは、こうした一例として Prostitutes' Education Network (<http://www.bayswan.org/penet.html>)がある。

\*

ウェブサイト制作上のノウハウに関しては、以下のような知見を参考にする必要があるだろう。例えば、2001年に乳癌や乳腺疾患に関する解説を行う私的なホームページを立ち上げた大谷彰一郎(2006)は、EBM(Evidenced Based Medicine)に基づく情報を平易な文章で提供し、電子メールによる相談室を設けた。この際特に留意した点として「乳房に何らかの症状を有しているが、全く予備知識のない女性でも理解しやすいように工夫したこと」(357)を挙げている。具体的には「まず乳房の症状別(しこり、痛み、発赤、乳頭からの分泌、乳頭のかゆみ・ただれ、腋の下のしこり)に解説し、可能性のある疾患について詳説した。また実際、病院受診時にどのような検査が施行されるのかについても具体的な行程、写真を加えることによりイメージ化しやすいように工夫した。自己触診の仕方も図表を使用し、より具体的に解説した。また不安をなるべく軽減するだけでも極力、明るい色調のHPにし、文章も親しみやすい口語調にした。またすべての専門用語には一般の方でも理解できるようリンクを作成した」(357)と記されている。

また藤田譲ら(1999)によると、白鷺病院ではホームページを設置するにあたり、社会資源に関する情報提供を目的に「相談室の扉」を開設したが、そこでは次のような

工夫を施した。「ホームページは情報が更新されないと、目新しさががないため、訪問する人が増えないと言われていた。したがって、再訪問してもらい、継続的にホームページを見てもらう仕掛けが必要になってくる。そこで、毎月テーマを決めて、内容を追加していくコンテンツとして、このページを掲載した（「ソーシャルワーカーからのこれがお薦め」）。テーマの内容は誰もが日常生活で利用できる福祉制度を中心に選んでいる。例えば健康保険の傷病手当や高額療養費、在宅サービスや車椅子の入手方法などがある」（44）。また「見る人が楽しめて親しみやすいよう、「相談室の扉」の表紙や各ページの背景色を季節に合わせて変更」（46）したり、「イラストや写真を用いてより見やすく、分かりやすい工夫をすること、利用者が手に入れたい情報を素早く手に入れられるよう索引を作成すること」（46）を行っている。

これらは技術的なことではあるが、不特定多数の利用者に利用されることを目的とするのであれば、必要不可欠なことである。しかし、現実としては、これらは技術的な問題というより、サイト運営に費やす労力とそれに伴う資金が捻出されるかどうかという経済的な問題とも絡んでくる。

## 【付録2】ユーザビリティについて

インターネットは、近年ビジネスに欠かせない重要なツールとなってきた。ビジネスでは、ウェブサイトが消費行動に影響するかどうか如実に現れるため、サイトの費用対効果が測りやすい。実際、費用対効果の高いサイトに関する分析・研究は、学術分野に比べてはるかに進んでいる。特に近年では「ユーザビリティ・サイエンス」に基づくウェブサイト構築、つまり、利用者の行動特性を理論的に把握し、実際に行動観察をしながらウェブサイトの戦略立案を行っていく手法が注目を集めている。これは、ウェブサイトの独自性を熟考した上で理論化されたノウハウである。素人が作るウェブサイトは、紙媒体向け（パンフレットなど）に考案された内容やデザインをそのまま用いることも多いが、こうした方法がインターネット上でも有効であるとは限らない。以下では、武井由紀子と遠藤直紀の共

著『ユーザ中心のウェブサイト戦略』（2006）を参照しながら、ユーザ中心の視点から見たウェブサイトの特性を考えてみたい。

ウェブサイトが他のメディアと究極的に異なるのは、それが「セルフサービスメディア」だという点である。制作者側の意図が何であれ、そのサイトが利用されるかどうかは「個人の意思と勘に依存する」（22）。例えば、テレビでは、ユーザは黙って画面を見ており、どの程度注意を向けるかどうかはともかく、制作者側のつくったシナリオに従って情報を受信する（33）。この点で、情報の流れは、空間的にも時間的にも一方向である。また、パンフレットでは、その情報を誰かが説明すること（あるいは、既に説明したことを補足すること）を前提としていることが多い。この場合も、ユーザの関心は、ある程度説明者によって誘導されることになる。しかし、インターネットの場合は、ユーザは制作側から何ら働きかけられることがない。この点で、インターネットは「セルフサービス」なメディアなのである。

武井&遠藤は、インターネットというメディアの特性を次のように要約している。

1. 前のめり型メディア・・・目的達成がされない場合には悪印象を持たれる。
2. 斜め読みメディア・・・紙に比べて可読性が低い。
3. 新鮮・網羅メディア・・・更新性と網羅的な情報が鍵になる。
4. 遠慮不要メディア・・・利用者は気軽に立ち寄るが、気兼ねなく立ち去る。
5. 比較メディア・・・他サイト（ブログ、ロコミ、掲示板など）と常に比較される。

以上から明らかなのは、いくら制作側がある情報供給に力を入れてページを作成しても、そのページに興味を持ってもらえなければ、そのページは読まれることはないということである。例えば、セックスワーカー向けに、制作側が重要と考える性感染症予防情報を掲載したとしても、それがユーザに興味を持たれなければ開かれることもないし、開かれたとしても、すぐに立ち去られてしまうということ

である。

したがって、ユーザに利用されるサイトを作るためには、制作側の「サイト運営目的」だけでは十分ではなく、「ユーザのサイト利用目的」も含めた複眼的な視点を持つ必要があり、そうした観点からサイトを構築していくことが重要である(162)。武井&遠藤は「サイト運営者は、自分とよく似たユーザを設定する傾向がある。「ユーザは〇〇が知りたいはずだ」といったユーザニーズを議論することがあるが、その大半は「自分がそうだからだ」とか「うちのサイトのユーザはこうあってほしい」といった自分のニーズを知らず知らずのうちに投影している。」(178)が、それではサイトは利用されるようにならないと述べている。

そこで重要になるのが、ターゲットユーザをうまく絞りこむことである。その際の指標になるのが次の3点である(178)。

- ・収益性の高いユーザ、ビジネス貢献度の高いユーザ
- ・規模の大きいユーザ
- ・サイト利用意向の高いユーザ

どこにターゲットを絞るかによって、サイトの内容は異なる。セックスワーカーに向けて性感染症情報を提供する場合、一人でも多くの人に見てもらえるように「規模の大きいユーザ」を想定するのか、性感染症に関心の高い「サイト利用意向の高いユーザ」を想定するのか、それとも、そこに掲載されている情報をコミュニティに還元してくれるような「貢献度の高いユーザ」を想定するのかによってサイトの内容は変わってくる。

また、より現実的な問題として、セックスワーカーがコンピュータを持っているのか、携帯サイトの利用か、それをうまく使いこなせるのか、それらを使う時間や興味があるのか、いつ・どういうタイミングで利用するのか、といったことも見極める必要がある。

武井&遠藤は、サイトの「戦略立案作業のゴール」は、「サイトのユーザ行動シナリオの策定」と同一でなければならないと論じている(162)。ここで言うシナリオとは、「ユーザを最終的にサイトのゴールにまで導く道筋や戦術を定義したもの」のことである。そして、これら両者を

一致させるために、常にユーザニーズを制作段階ごとに照合しながらサイトを構築することを推奨している。

ただし、この場合のユーザニーズというのは、「ユーザの意見」ではなく、実際の行動を観察することだと言う(85)。武井&遠藤は、ユーザに意見を求めたとしても、それが実際に行動に移されるかどうかはわからないということ、ジェラルド・ザルツマンらの先行研究事例を引用しながら説明している。要点のみを整理するならば、(1)「ニーズ言語化の限界」(人間は自分の行動をいつも意識的におこなっているわけではない)、(2)「言語化されたニーズと実際の行動のギャップ」(認知の限界から、言語化できたとしても、それが本当のニーズを反映するとは限らない)ということになる。特に2点目に関しては、次のような4種類の限界があるとされる。

- ・想像に対する評価の限界(想像で欲しいものが、実際に欲しいものとは限らない)
- ・社会性による意見の限界(回答者の期待に応えよう、社会的に受け入れられようとする)
- ・自らを正当化する防衛本能(自分の行動を合理化、自分の行動を否定しにくい)
- ・記憶の曖昧さによる限界(意識した行動でないだけに、記憶があいまい)

これらの知見は、心理学や社会学の言説分析における課題とも共通している(e.g. Riessman 1993)。

以上を踏まえ、武井&遠藤はサイト戦略立案方法をステップごとに詳述しているが、そこでポイントとなるのは、ウェブサイトは、セルフサービス・メディアであるため、他のメディア以上に制作側の意図が伝わりにくい。そこで、ターゲットユーザをどう絞り込むのか、ユーザニーズをどうサイト構築に反映させるかが重要な鍵を握るようになる、ということである。

参考文献

- Bullough, V. & Bullough, B. (1987). *Women and Prostitution: A Social History*. Amherst, NY: Prometheus Books.
- Bull, S. S., McFarlane, M. & King, D. (2001). Barriers to STD/HIV Prevention on the Internet. *Health Education Research*, 16 (6), 661-670.
- Bakx, A., Fontys, E. A. & Van Der Sanden, J. M. (2002). Development and evaluation of a student-centred multimedia self-assessment instrument for social-communicative competence. *Instructional Science*, 30 (5), 335-359.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: Social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press. (邦訳『激動社会の中の自己効力』金子書房、1997)
- Cash, K. (1995). Experimental educational intervention for AIDS prevention among Northern Thai single migratory factory workers. *Women and AIDS Research Program* (Research Report Series No. 9). Washington: International Center for Research on Women.
- Fleetwood, J., Vaught, W., Feldman, D., Gracely, E., Kassutto, Z. & Novack, D. (2000). MedEthEx Online: a computer-based learning program in medical ethics and communication skills. *Teaching and Learning in Medicine*, 2 (2), 96-104.
- Guzman, B., Schlehofer-Sutton, M., Villanueva, C., Dello Stritto, M., Casad, B. & Feria, A. (2003). Let's talk about sex: how comfortable discussions about sex impact teen sexual behavior. *Journal of Health Communication*, 8, 583-598.
- Gustafson, D. H., Hawkins, R., Boberg, E., Pingree, S., Serlin, R. E., Graziano, F. and Chan, C. L. (1999) Impact of a patient-centered, computer-based health information/support system. *American Journal of Preventive Medicine*, 16, 1-9.
- Keller, S.N., LaBelle, H., Karimi, N. & Gupta, S. (2004). Talking about STD/HIV Prevention: A Look at Communication Online. *AIDS Care*, 16 (8), 977-992.
- Kapoun, J. (2000). *Criteria for evaluating websites*. Washington, DC: American Library Association.
- Moore, J., Harrison, J. S., Kay, K. L., Deren, S. & Doll, L. S. (1995). Factors associated with Hispanic women's HIV-related communication and condom use with male partners. *AIDS Care*, 7, 415-428.
- Ribisl, K. M., Kim, A. E. & Williams, R. (2002). Are the sales practices of internet cigarette vendors good enough to prevent sales to minors? *American Journal of Public Health*, 92 (6), 940-942.
- Riessman, Catherine Kohler. 1993. *Narrative Analysis*. (Qualitative research methods; v. 30). Newbury Park, CA: SAGE Publications.
- Rosenstock, I. M. & Strecher, V. J. (1997). The health belief model. In: K. Glanz, F. M. Lewis & B. K. Rimer (Eds), *Health behavior and health education: theory, research and practice* (pp. 41-59). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Salway, S. (1994). How attitudes toward family planning and discussion between wives and husbands affect contraceptive use in Ghana. *International Family Planning Perspectives*, 20 (2), 44-47.
- Santhya, K. G. & Dasvarma, G. L. (2002). Spousal communication on reproductive illness among rural women in southern India. *Culture, Health & Sexuality*, 4, 223-236.

- SIECUS. (1996). *The Guidelines for Comprehensive Sexuality Education, Kindergarten-12th Grade* ([http://www.siecus.org/school/sex\\_ed/guidelines/guide0000.html](http://www.siecus.org/school/sex_ed/guidelines/guide0000.html)).
- Smith, M., Gertz, E., Alvarez, S., Lurie, P. (2000). The Content and Accessibility of Sex Education Information on the Internet. *Health Education & Behavior*, 27: 684-694
- UCSF, AIDS Research Institute. (2007). How does the Internet affect HIV prevention? (<http://www.caps.ucsf.edu/pubs/FS/internet.php>).
- Young, S.S.C. (2003). Integrating ICT into second language education in a vocational high school. *Journal of Computer Assisted Learning*, 19 (4), 447-462.
- Winker, M. A., Flanagan, A., Chi-Lum, B., White, J., Andrews, K., Kennett, R. L., DeAngelis, C. D. and Musacchio, R. A. (2000). Guidelines for medical and health information sites on the Internet: principles governing AMA Websites. *Journal of the American Medical Association*, 283, 1600-1601.
- 青山薫、谷口和憲、辻智子 (2007) 「買春・セックスワーク・性暴力」、『戦争と性』第 26 号、96-124。
- 青山薫 (2007) 『「セックスワーカー」とは誰か—移住・性労働・人身取引の構造と経験』、大月書店。
- 内田樹 (2004) 「セックスワーカー—「セックスワークというお仕事」と自己決定権」、『応用倫理学講義 5—性／愛』、岩波書店、79-98。
- 小谷野敦 (2007) 『日本買春史—遊行女婦人からソープランドまで』、新潮選書。
- 大谷彰一郎「乳腺疾患に関するホームページ開設ならびにメール医療相談の試み—3,901 件のメール医療相談内容の検討」、『乳癌の臨床』第 21 巻第 4 号、353-358。
- 要友紀子、水島希、木原雅子、木原正博 (2003) 「日本在住の SW における HIV/STD 関連知識・行動及び予防・支援対策の開発に関する研究 II . インターネットを用いた予防介入プログラムの開発」、『HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究 平成 14 年度研究報告書』、377。
- 川村和久 (2002) 「小児科医が変わる 健康支援へのチャレンジ いま小児医療を変える インターネットでサポート」、『からだの科学』臨時増刊 (9 月) 号、114-119。
- 榊原佳織、藤田謙、横田ちづ (1999) 「ホームページ「相談室の扉」の開設について」、『医療と福祉』第 33 巻第 1 号、42-47。
- 武井由紀子&遠藤直紀 (2006) 『ユーザ中心のウェブサイト戦略』ソフトバンク クリエイティブ株式会社。
- 田島美幸、小山智典、竹島正、北井暁子、上田茂 (2006) 「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究 自殺予防対策支援ページ「いきる」—Web を用いた自殺予防対策支援に関する情報提供のあり方の検討」、『自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究 平成 17 年度 総括・分担研究報告書 1』、283-301。
- 田中祐次 (2006) 「医療者と患者のパートナーシップ 患者中心の医療を模索して 「患者会」をつなぐ」、『看護教育』第 47 巻第 6 号、477-480。
- 中村美亜 (2007) 「性娯楽施設・産業に係る人々への HIV/AIDS 予防介入の可能性：海外の先行事例の検討を通して」、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策事業『日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究、平成 18 年度総括・分担研究報告書』、48-66。
- ブローラー、バーン&ボニー・ブローラー (1991) 『売春の社会史』香川檀他訳、筑摩書房。

## MIX イベント「セックスワーカーのいるまち」成果報告

生島 嗣（ぶれいす東京）

本年度、財団法人エイズ予防財団・平成19年度エイズ対策研究推進事業「研究成果発表会（国民向け）」の助成を受け、本研究班として二つの成果発表会を大阪と東京でそれぞれ開催することができた。今回、この機会を研究成果を発表する場としてだけでなく、「性娯楽施設・産業に係る人々のセクシュアル・ヘルスを促進する多様な「しかけ」の検討・開発と実践」の場とすべく、これら二つの機会を「セックスワーカーのいるまち」実行委員会によるMIXイベント「セックスワーカーのいるまち」として位置づけることにした。実行委員会からの案内文は以下の通りである。

### MIX イベント「セックスワーカーのいるまち」開催のお知らせ

大阪の「堂山町」あるいは東京の「新宿2丁目」－ 人が人とつながり、知識や情報とつながっていく町。これらの町は、ゲイだけでなくセックスワーカーにとってもそうした「場」として機能しているのかもしれませんが。今回「セックスワーカーのいるまち」と題し、シンポジウム・トーク・展覧会のmixイベントを開催します。ワーカーとお客、ワーカーと経営者、異業種のワーカーどうし、ワーカーとワーカーではない人、コミュニティと行政と医療機関などなど…の間にある「ギャップ」に、あきらめたり目をそらしたりすることなく、それぞれが安心して仕事や生活ができるのはどんな「まち」なのか？を考えます。

結果、大阪で約90名、東京で約80名と、会場を埋め尽くす参集をみた。また当日は、Sexy Mountainのタミヤリョウコ氏（現役セックスワーカー）らの協力を得て、「風俗で遊ぶ皆様が、性感染症にできるだけかからず、気持ち良く楽しめることを目的として制作されました」というフリーペーパー『ビッグプレジャーナイトマガジン Vol.1&Vol.2』が参加者全員に配布され、出演者の一人でもあったSWASHの要友紀子氏（現役セックスワーカー）からは『お仕事マニュアル』などの各種パンフレット見本が提供された。このように様々な関係者のご協力を得ることができた今回の成果発表会の実施内容を、以下にご報告する。

1. 平成19年度エイズ対策研究推進事業「研究成果発表会（国民向け）」・「Bridging the Gap：日本の性娯楽施設・産業に係る人々の支援・予防対策の開発に関する学際的研究」の成果をコミュニティに還元していくために～セックスワーカーのいるまち～シンポジウム

開催日・場所：平成20年1月27日（日）、於：CLUB D'C（大阪府大阪市内）





## 発表内容

第一部 (18:30~20:30 開場 18:00)

- ① インTRODクシヨン.....東優子 (大阪府立大学)
- ② Voices from Sexworkers.....要友紀子 (SWASH)・  
鍵田いずみ (MASH 大阪)
- ③ Voices from 新宿2丁目.....松沢呉一 (ライター)
- ④ Voices from 堂山町.....山田創平 (財・エイズ予防財  
団)
- ⑤ セックスワーカーのいるまち.....出演者全員

第二部 (21:00~22:00)

シャンソンライブ.....シモーヌ深雪 (Vo)・ ANKO  
(Vo)・吉田幸生 (Pf)

## 総括

研究報告1:「日本の性娯楽施設・産業に関わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」の概要(東優子)では、イントロダクションとして、研究の概要の他、エイズ予防指針における「個別施策層」という概念(そしてなぜセックスワーカーやセックスワークを利用する人々が「個別施策層」として挙げられているのか)、「性の健康と権利」の概念と理念について説明が加えられた。

研究報告2:Voices from Sexworkers(要友紀子/SWASH、鍵田いずみ/MASH 大阪、張由紀夫/Rainbow Ring)においては、「当事者」の声、「当事者」による活動報告、またそこで経験される課題が話され、現状を垣間見ると同時に、「他者の問題」を自分たちの「社会の問題」としてひきつけて考えるきっかけになった。

研究報告3Voices from 新宿2丁目(松沢呉一/ライター)と研究報告4Voices from 堂山町(山田創平/財・エイズ予防財団)においては、「セックスワーカーのいるまち」の成り立ちを歴史的に読み解くなど、他で聞く機会がほとんどない興味深い研究報告がなされた。ゲイ・コミュニティとセックスワーカー・コミュニティの相違を輪郭づけたことにより、エイズ対策における課題を浮かび上がらせることができ、医療・福祉・行政・教育等に関わる「専門家層」のみならず、NPO 関係者、学生等の一般市民層に対して、問題の所在を多角的に検証する視点の重要性を伝えることができたと考える。

第二部のシャンソンライブについては、「シモーヌ深雪

さんらのステージを見たくて来ました」という来場者も多数いるなど、イベントへの集客における過小評価できない効果があったと評価できる。出演者らはゲイ・コミュニティのキーパーソンであり、セックスワーカーをテーマとする語りとシャンソンを盛り込んだ素晴らしいステージはもとより、今回のイベントの広報にも尽力していただいた。結果、堂山町というゲイ・コミュニティとのMIX化を象徴するにふさわしい内容となったことを感謝したい。

2. 平成19年度エイズ対策研究推進事業「研究成果発表会(国民向け)」「セックスワークを仕事とする私が日常的に感じたり考えたりするHIV/AIDS」トークイベント

開催日・場所:平成20年2月2日(日)、於:community center  
akta(東京都新宿区新宿2丁目)

## 発表内容

第一部 (17:00~17:40)

- ① あいさつ(東優子/大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科准教授)
- ② 報告1(イントロダクションを兼ねて)「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」.....東優子(大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科准教授)
- ③ 報告2(分担研究課題)「青年期女性における金銭が介在する性行動とセクシュアルヘルスの問題ー携帯電話のwebアンケートを用いた調査からー」.....野坂祐子(大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター講師)



## 第二部 (17:40~19:00)

トーク&トーク「セックスワークを仕事とする私が日常的に感じたり考えたりする HIV/AIDS : 10 人のインタビューを終えて感じること」……アキラ(元セックスワーカー)、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ(元セックスワーカー)、松沢 呉一(ライター)、生島 嗣(ぶれいす東京)



- ・ インタビューを終えて感じること： (たとえば松沢氏が担当した 4 人について) 3 人までがコンドームをつける店や、性感のようなソフトサービスを選択していて、風俗嬢全体の中では、ガードの堅い方かと思うのですが、これは私の知人というところでのフィルターがかかっているためかと思ったりもします。これは他の 6 人についても同様で、どちらかと言えば全体に優等生が多いと思うのですが、この社会には「セックスワーカーは危険」「セックスワーカーは何も考えてない」といった先入観をひとたび払拭できるのかもしれない。以上の意見が聞かれた。
- ・ ヘテロ、ゲイの共通点、相違点について： セックスワーカー・アイデンティティなるものが存在しないというのは、MSMと大きく異なるところである。またそれゆえに、コミュニティをどう捕捉するかという問題が浮上する、といった問題点が指摘された。
- ・ なぜ「セックスワーカーのいるまち」なのか： ターゲットを個人ではなく、街としたねらいは、これまでのセックスワーカーによるワーカーのための運動には、個人をフィーチャーしたものが多かった。しかし、必ずしもカムアウトしなくてもやっていけるやりかたがあるのでは。もちろん、ある時点を超えたらそういう活動も必要になる。また、特別な存在から日常的な存在であることを認識させるためには、特別な場所を見せるのではなく、我々が住んでいる街から発想し始めることが大事である。「まち」で生きるということは、いろんな人と影響を与えあいながら生きていると思う。それは、セックスワーカーであれお客であれそのどちらでもない人であれ同じである。セックスワーカーが、他の職業並みには「仕事のやりがい」みたいなものを感じることができるとするには、たぶんひとつはもっとセックスにつ

いてその人が必要とする話がしやすくなることが大事である。さらには、セックスワークを話題にする時に芋蔓のように人々が連想する、未成年者のセックスとかドラッグとか人身売買とか暴力団とかについての、あるていど明解な見解や態度を持つこと。こうした事が、「それを受け止める社会の側にもパワーを蓄積する時間と労力」につながると考えられる。以上について、パネリストからそれぞれ発言があった。

- ・ LIVING TOGETHRE 的に個人の語りを収集することがどのような可能性を秘めているのか： 多くの市民はセックスワーカーの語りにふれる機会が増えたり、セックスワーカー自身も他のワーカーの語りにふれる機会が増える。それが匿名であっても、いや、むしろ匿名であるがために、そこに自分との共通点を見出しやすいはず。身の回りにいるかもしれない、あるいは自分もそうなるかもしれないという想像力を刺激して、手に届きにくいセックスワークや HIV という言葉を身近に感じさせることができるのではないかと。以上の指摘があった。
- ・ 展覧会とシンポジウムとトークの組み合わせという、今回のイベントのありかたについて： 観客の反応もわりとすぐに返ってくる場で提示される、その「場」をしかけとして作っていくことこの「臨場感」が、提示する側にも、見聞きする側にも魅力になる。

以上の説明と感想が各パネリストから発せられた。

一般にはこうしたシンポジウムに対する批判として、「まとまりのなさ」が指摘されることも多いが、なぜゆえ

に「まち」に注目したのかという説明、「個別施策層」とは何かについて、各シンポジストから説明がなされたことにより、参加者にも主催者の意図を十分に伝えることができたと推測される。今回の参加者からはそうした声が聞かれなかったばかりか「まとまりのよさ」を指摘する声が聞かれたことはその証左であると自負している。

展覧会と2月2日のトークイベントともに好評であり、会場に入りきれなかった参加者にご迷惑をおかけするぐらいであった。こうした場の継続的開催を望む声が多く、来年度もぜひ申請して実現にご協力いただけることを願っている。

### 3. 平成19年度エイズ対策研究推進事業「研究成果発表会（国民向け）」・「セックスワークを仕事とする私が日常的に感じたり考えたりする HIV/AIDS」展覧会

開催日・場所：平成20年1月22日（火）～2月3日（日）、  
於：community center akta（東京・新宿2丁目）と community center dista（大阪・堂山町）同時開催

#### 発表内容

セックスワーカー10名へのインタビュー内容から抜粋した文と写真の展覧会。展示された10枚のパネルの内容は、東京や大阪、京都などでインタビューした10名のセックスワーカーの言葉を抜粋し、関連写真と合わせて構成したもの。

#### 【来場者の声】

1. 平成19年度エイズ対策研究推進事業「研究成果発表会（国民向け）」・「Bridging the Gap：日本の性娯楽施設・産業に係る人々の支援・予防対策の開発に関する学際的研究」の成果をコミュニティに還元していくために～セックスワーカーのいるまち～シンポジウム」

##### (1) 来場者数：約90名

※根拠は、来場者はすべて設置された受付を通し、そこで配布資料を受け取るようになっていたため、かなり正確な来場者数がカウントされているため

##### (2) アンケート結果

- 回答者34名（回収率38%）
- 年代：20代16名、30代9名、40代7名、不明1名。
- 回答者の特性：セックスワーク関係4名、教育関係者6名、医療・心理・福祉関係5名、学生9名、NGO関係者3名、その他10名。
- 情報の入手経路：友人や知人から教えてもらった、誘われた17名、開催告知のメールが届いた7名、チラシ・ポスターを見た5名、インターネット（mixiなど）で見た3名、その他2名。
- 会場（CLUB D'C）の雰囲気や居心地の評価：①非常に良い8名、②良い16名、③ふつう9名、④悪い（理由：暑い）1名、⑤非常に悪い0名。
- 第一部（シンポジウム）の内容評価：全体評価では、①非常に良い16名、②良い15名、③ふつう1名、不明2名（理由：遅刻してきたので）。
- 第二部（ライブ）の内容評価：①非常に良い6名、②良い1名、③ふつう1名、不明26名。
- 個別評価：イントロダクション：「日本の性娯楽施設・産業に関わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」の概要（東優子）については、「①非常によい」と「②よい」が22名、「③ふつう」が8名、「④悪い」と「⑤とても悪い」が0名、「不明（理由：遅刻したなど）」が4名。Voices from Sexworkers（要友紀子/SWASH、鍵田いずみ/MASH 大阪、張由紀夫/Rainbow Ring）については、「①非常によい」と「②よい」が27名、「③ふつう」が3名、「④悪い」と「⑤とても悪い」が0名、「不明（理由：遅刻したなど）」が4名。Voices from 新宿2丁目（松沢呉一/ライター）については、「①非常によい」と「②よい」が25名、「③ふつう」が6名、「④悪い」と「⑤とても悪い」が0名、「不明（理由：遅刻したなど）」が3名。Voices from 堂山町（山田創平/財・エイズ予防財団）については、「①非常によい」と「②よい」が24名、「③ふつう」が7名、「④悪い」と「⑤とても悪い」が0名、「不明（理由：遅刻したなど）」が3名。
- 自由意見：「あるようで無い、必要な集まりだと思います。恒例化して欲しい。」（大学生）、「他では聞く

ことができない話ばかりでした。ありがとうございます。」(保健所保健師)、「私自身の今後の行動を考えていく上で非常にためになりました」(大学生)、「もともとこういった類の考察・研究を始める入口としたいと思ってきたので、充実度120%です。」(大学生)、「面白かった。笑えることや、泣きそなことも含め、すごく興味深く、ホントにもっといろんな人がしんどくない形でこのことについて話したり共有したりできたらいいと思う。というかもっと話したい。そゆう場をつくりたい。」(介護ヘルパー)、「セックスワーカーのコミュニティの形成の議論について、ゲイのコミュニティ形成の問題との相違など、考えるきっかけになりました。」(セクシュアリティ団体関係者)、「当事者の人たちの話が一番よかった。自分がまだまだ知らないことが多いことがよくわかった。多様な性、生き方がジャマされない保障される社会になってほしい!!」(日本女性学研究会会員)、その他多数。

2. 平成19年度エイズ対策研究推進事業「研究成果発表会(国民向け)・「セックスワークを仕事とする私が日常的に感じたり考えたりするHIV/AIDS」トークイベント

(1) 来場者数: 約80名(※来場者はすべて設置された受付を通し、そこで配布資料を受け取るようになっていたため、かなり正確な来場者数がカウントされている)

(2) アンケート結果(トークイベント)

回答者34名(回収率56%)

年代: 10代0名、20代18名、30代18名、40代5名、50代3名、不明1名。<ゲイ11名、レズビアン3名、バイセクシュアル2名、女性(ヘテロ)8名、男性(ヘテロ)2名、MtF1名、不明18名>

- ・ 来場者特性: NGO関係者8名、学生7名、セックスワーク関係者8名、医療関係者5名、教育関係者5名(高校教諭、大学非常勤講師、牧師、障がい者介助各1名、(財)〇〇市青少年育成〇〇、そのほか1名<重複回答アリ>)、会社員3名、新聞記者/東京メトロポリタンフォーラム/地方自治体職員/行政職員/議員/保健師/人権NGO各1名、その他2名

<重複回答あり>。

- ・ 情報の入手経路: チラシ・ポスターにて17名、開催告知のメールにて3名、インターネットにて5名、企画関係者や出演者から直接6名、友人や知人から17名、たまたま会場を訪れて0名、その他(姉の紹介/1月のLiving Togetherのイベントにて/不明各1名)、不明1名<重複回答あり>。
- ・ 開催条件(交通・日・時間)評価: ①非常に良い7名、②良い14名、③ふつう18名、④悪い4名、⑤非常に悪い0名。
- ・ akta 来場経験: 初めて来た17名、来場経験あり17名、頻繁に来場している8名、不明3名
- ・ 会場全体の雰囲気: ①非常に良い17名、②良い22名、③ふつう4名、④悪い1名、⑤非常に悪い0名、不明1名。

報告1(イントロダクションを兼ねて)「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」.....東優子(大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科准教授)

- ・ 理解しやすかったかどうか: ①非常に分かり易かった12名、②わかりやすかった15名、③どちらとも言えない9名、④わかりにくかった2名、⑤非常にわかりにくかった0名、不明7名
- ・ 話の内容: ①非常に良い12名、②良い15名、③ふつう12名、④悪い/⑤非常に悪い共に0名、不明6名。
- ・ 自由意見: 「時間がなくて、飛ばされてしまった部分があったのが残念でした。」「世界で性についての宣言があることを初めて知りました。」「今まで全く知らなかったことを教えていただきました、有り難うございました。」「全体的にフワフワしていて、もう少し内容を絞った方が良かったと思います。」等。

報告2(分担研究課題)「青年期女性における金銭が介在する性行動とセクシュアルヘルスの問題ー携帯電話のwebアンケートを用いた調査からー」.....野坂祐子(大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター講師)

- ・ 理解しやすかったかどうか: ①非常に分かり易かった18名、②わかりやすかった15名、③どちらとも